

孤独の青の爪、それを見る狙撃手の目

作——伊西殻

わたしは狙撃手だ。わたし——イヴリン・F・マクガイア。

そして彼女は観測手である。彼女——ニコール・N・ニックス。

これらは大抵兼任されるものであり、当然ながらわたしも観測手でありうるが、彼女はもはや狙撃手にはなりえない。

正確に言えば、現在の彼女は観測手としての役目すら果たせない。それでもわたしと彼女が今ともに在るのは、わたしが彼女に対して罪を背負っているからだ。

わたしたちは十五階建てのビルの屋上にいる。そんな場所に伏射でライフルを構える人間がいる、服装からして公的な存在ではそうだが、そうなるが一番わかりやすいイメージは？ そうだ、殺し屋だ。わたしたちは殺し屋のスナイパーである。非現実的で、割に合わないことに。

わたしはうつ伏せのまま双眼鏡を覗く。

「目標は三一〇ヤード先のレストラン、『レイン84』、入り口、青いアーチテント」

脚を広げて隣に座るニコールが淡々と単語を並べる。頭を深く垂れ、目標に背を向けるニコールが。今わたしの視界は双眼鏡を通して三一〇ヤード先で埋まっているが、すぐ隣のニコールがそうしているとはわかる。聞こえる声のこもりかたと方向から、そしてなによりいつもそうだから。

「位置は確認、わたしもそこを見てる」

青いアーチテントに白抜きで店名が記されたレストランを自分の

目で確かめて、わたしは答える。それからニコールを振り返る。彼女はやはりわたしが頭に描いていた通りの姿勢でいる。真っ直ぐな髪が長く落ち、その顔をほとんど隠しているが、隙間から辛うじて濃い色のサングラスが見える。そのサングラスの奥、閉じた両の瞳とその周辺が、耕されたかのように乱れているのをわたしは知っている。

ニコールは視力をまったく持たない。彼女が先ほど口にした内容は、事前に提供された情報を繰り返しているだけだ。

わたしは双眼鏡を下ろし、ライフルに茶色い手袋の手を掛けた。

わたしの前に二脚で固定してあるそれはレミントンM700p。弾は300ウインマゲ、減音器付き。随分まともな、素晴らしいと言ったよい装備なので今回は運が良い。わたしたちは自分の好みで武器を選べる環境にない。これを使えと渡される物をそのまま受け取って、整備をして、なんとか使う。粗悪なコピーライフルと粗悪な弾薬と頼りにならないスコープであったり、状況に合わない装備であったりしてもだ。わたしたちは強大なファミリーの幹部や国家の関係者が頭を下げて縋りに来る切り札などではけっしてなく、そこそこの犯罪グループに飼われている下っ端である。

ライフルのスコープを覗く。十字をレストランの入口にある程度合わせる。

「ねえ、ニコール」

わたしが声を掛けると、ニコールは顔をあげる。黙ってジャケットのポケットを探って煙草を、レザーパンツのポケットを探ってライターを取り出す。銘柄はラッキーストライク、わかりやすいほうがいい、それを一本抜いて赤い唇に咥え、火をつける。吸殻くらは持ち去るが、わたしたちは痕跡に關してさほど神経質にならない。ニコールは煙草を何度か口元ですばすばやってから、わたしの顔に